

ニューワークとジェンダーについての一考察  
—ワーカーズ・コレクティブを対象に—  
嶋崎 東子（お茶の水女大）

<目的>雇用されるのではなく、自営業でもない新しい働き方（ニューワーク）をする人が近年増加してきた。その典型的なものに、ワーカーズ・コレクティブ（働く者が組織の所有者となり、自ら経営に参加するような働き方）がある。本研究では、生活クラブ生協の運動から生まれたワーカーズ・コレクティブを対象として行なった調査を利用し、その働き方がメンバー自身のエンパワーメントとなっている面を確認するとともに、女性ゆえに直面している問題について明らかにしたい。

<方法>1995年7月に行なったアンケート調査を中心に、資料・文献研究とヒアリングによって収集された情報などを加味して考察する。アンケート調査は、ワーカーズ・コレクティブの各グループの代表者を対象とした団体調査と、メンバー個人を対象とした個人調査により成る。分析対象グループは、東京都、神奈川県、千葉県の75グループ、分析対象者はそれらのグループに所属するなかの297名である。

<結果>メンバーの多くは、地域社会における生活、環境、福祉などの向上をめざし働いている。また、グループ内で、あるいは他のグループとのネットワークを通じて友人を得ることも望んでいるとともに、実際に人間関係への満足度も高い。しかし、多くのメンバーが、自らの仕事を事業として認識しているにもかかわらず、時給面などではパートタイム労働よりも低い場合もあるというのが現状である。「非営利であることと、ある程度の収入を求めることは矛盾しないのではないか」という考えを持ちながらも、低収入であることに甘んじなくてはならないのが現実なのである。